

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	柴の庵：文苑
Author(s)	中内，蝶々子
Citation	龍南會雜誌， 4 0： 4 8 - 5 0
Issue date	1895-11-04
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4655
Right	

文苑

柴の庵

中内蝶々子

柴の庵際々の中に
見ゆ

千、草、に、す、だ、く、虫、の、音、い、と、淋、し、く、あ、ら、し、に、散、り、布、く、木、の、葉、の、こ、と、に、繁、く、た、つ、る、
の、水、の、峯、の、松、風、に、答、ふ、る、風、情、な、ど、秋、の、景、色、こ、そ、げ、に、山、里、の、あ、は、れ、を、そ、へ、ぬ、べ、け、
れ、一、夜、東、の、山、の、端、に、さ、し、い、づ、る、月、の、艶、な、る、に、催、さ、れ、て、そ、こ、は、か、と、な、く、さ、ま、よ、ひ、
行、き、け、る、に、程、遠、か、ら、ぬ、谷、陰、の、軒、朽、ち、た、る、古、寺、の、傍、に、燈、火、の、光、ぞ、す、な、る、さ、て、も、怪、
し、と、見、や、れ、ば、い、つ、の、頃、結、び、た、り、け、ん、ま、だ、新、玄、き、柴、の、庵、な、り、け、る、い、か、な、る、人、の、浮、
世、を、の、が、れ、け、る、に、か、あ、ら、ん、看、經、の、聲、の、ろ、す、か、に、き、こ、ゆ、る、も、ゆ、か、し、く、香、の、煙、の、ろ、
を、る、も、こ、ゝ、ろ、に、く、し、

筆々動人

其、まゝ、過、ぎ、行、か、ん、も、流、石、な、れ、ば、玄、ば、し、門、の、外、に、佇、む、は、ど、に、や、が、て、看、經、の、聲、は、や、
み、ぬ、程、な、く、障、子、ひ、ら、き、い、づ、る、け、は、ひ、の、す、な、る、に、立、ち、よ、り、て、垣、間、見、す、れ、ば、こ、れ、ぞ、
我、が、親、し、か、り、し、友、某、少、尉、が、妻、な、り、け、る、お、の、れ、お、ど、ろ、き、て、い、か、な、る、故、に、て、かゝ、る、
所、に、住、み、給、へ、る、ぞ、と、問、ひ、け、れ、ば、妻、の、い、は、く、妾、ハ、少、尉、の、ハ、妻、と、は、い、へ、ど、名、の、み、
に、し、て、い、ま、だ、合、番、の、禮、を、さ、へ、舉、げ、ぬ、身、な、れ、ば、の、君、に、對、し、て、い、う、で、か、憚、る、こ、と、
の、あ、る、べ、き、更、ら、に、よ、き、え、に、し、を、求、め、た、ま、へ、あ、た、ら、御、身、を、一、生、深、山、の、埋、木、と、な、し、
は、た、さ、ん、は、い、か、に、惜、し、か、ら、ざ、ら、ん、な、ど、すゝむ、る、人、も、あ、り、し、か、ど、よ、し、そ、の、禮、ハ、舉、

この貞婦を借り來りて一世の婦女子を罵倒し去る亦以て世教に益するに足る

一篇の關鍵亦是一篇の總束

餘音不盡

松の木柱云々柴の庵に應ず貞女を結び月を結び感概を結ぶ一糸不漏

げずとも、妾ハ一度かの君にちぎりし身なれば、なごか兩夫に見えんとしても思ひ侍るべき。とてかくハ世に遠ざかりて、こゝには住みけるなりといへり。
さて、もけなげなる女かな。道德やぶれて、人倫ミだれし。今の世に、此女の如きものは、幾人かある。歲月久しく、かしづきし夫のうせたるに、さへ七七日の立ちも終らぬには、や他し男に身をまかすもの、多きが例なるをや。あわれ泥中の蓮、瓦裏の玉とは、此女などをやいふべからん。めでたしといふもおろかなり。

さて、某はおのれが幼き時よりの親しき友にてありけるが、去年の夏大學を卒へ、幾はともなく陸軍豫備少尉となりて、第五師團にめされ、次で朝鮮の國にわたり、えときし後は、絶えて音信もなかりしを、今とし夏の初めつかたの頃なりし、その父なる人のたよりに、我が子は海城とやらんの戦に討死しけると知らせられた。せられぬげにも、常なきは世の習ひにて、生きてかへるを期せぬは軍人の常なれど、凱歌擧げてかへりこん日を待ち遠しく思ひつるは、人の情なり。おのれこそし國にうへりて、その墓に花などたむけつゝ、涙止めがたくなし、かりけるに、今またゆくなく、その妻なる人のさまを見たるいふばかりなし。まして、未來の夫と頼みたる人のうせにきと聞きたる妻の、そもいかにばかり悲、えかるべきと思ひやられければ、とやかくと慰めつゝ、かへり見れば、まだ二十にも足らぬ花の顔、さし入る月に照り匂ひけるに、はら／＼と落つる涙をうちぬぐふも、一しは哀にぞ見えければ、やがてまうり出で、松の木ばしら、竹の垣、たきふし、えげき世の中にも、この一ふしの操を守れる女

ぞあるかいみにすべし女らよと月の光に筆とりつ。

乙未秋十月

稼堂陳人批

第五高等學校開校紀念式の歌

助教授 園 哲雄

阿蘇の峰より

いや高き

君が御蔭に

立初めし

學びどころの

さうえゆく

その本つ日を

ことほぎて

本にむくいん

眞心の

あかきはやがて

日の本の

光ともなり

大君の

御稜威やち代に

ういやかむ

述懷

禾の舍あるじ

君をおもふ道一筋をたかへすは骨はかりとも身はならはなれ

小濱道中小學子どもの車をねひくるがらうかはしくて

車にゆられながらかきて興へける

たれか子を跡ねふをの子あはれやとみるもわか子に思ひあはせて

山中に水の上下にながるゝあり

末終に海にこそ入れ溪川のゑたゆくもあり上ゆくもあり

藤の谷橋といふ橋のかゝれるに

山高みかゝる坂路をいつまでかよち登れとやふちの谷はし